高山の文化を高めた人々 61

同人誌『飛騨作家』を60号まで刊行

霞　好夫（本名 外尾 春雄）

田之下 徳重

ラバウル戦に参加した霞には書く題材はいくらでもあった。『文苑ひだ』の四号に「険しきがゆえに」五十枚を発表。書評は『文苑ひだ』と交友のあった犬山の詩人、吉田暁一郎の「死の山　生の山」を書き、五号には「嘘と真実の遺書」四十五枚を発表した。

霞好夫は、小説を霞好夫名で、評論は本名の外尾春雄で発表することになる。

私が書評を頼むと、いつも心よく引き受け、短期間に書いてくれるのだった。

六号には「復讐」第一部四十五枚と早船ちよ著『キューポラのある街』（昭和三十六年児童文学者協会賞受賞、日活映画　吉永小百合第一回主演映画）の書評を書いた。

市民文化会館のロビーにて

外尾さんは〝郷土の作家に非礼〟と言いながらも何の臆面もなく、思いつくままに書き綴り、早船さんの作品を高く評価しながらも、いくつかの難点を鋭く突いたものだった。後日、早船ちよさんがそのことに関し、外尾さんに恐縮しながら弁明するのを、外尾さんがばつの悪い顔で戸惑うさまに、私は笑いがこらえ切れなかった。

霞好夫は「復讐」を七号、八号で書き終えるのだが、作品を書きたいばかりの霞好夫は、八号編集後記に次のように綴っている。「年一回しか発行できぬということは、年一回しか作品が発表できないということである。黙っていても原稿があつまる。みんなの熱意が集結すれば雑誌は押し出されてくる。初志を思いおこしてがんばろう。」とある。あまりにも不甲斐のない私に業を煮やしてのことなのである。発行かなわぬと思った私はバトンを霞好夫に渡すことになる。

それから一年の準備を経て、昭和四十二年七月、早船ちよ、江夏美好のお二人に霞好夫は特別寄稿を頂きながら『飛騨作家』の創刊を華々しくスタートさせる。

霞好夫は創刊号から「若草の歌」を連載するのであるが、十号から飛騨の歴史に着目し、「大原騒動」について書くことになる。

「やがて来る夜明けのために―大原彦四郎の妻―」は十二号、十三号に発表され、上梓される。その帯に新田次郎が推薦の一文を載せてあるのを抜粋すると、「瞠目すべき歴史小説。大原騒動の全貌を描き、代官夫人の諫死に到る感動の力作」とある。

同じく『飛騨作家』に発表した「天明嵐」は、後に三年間にわたって高山市民時報に連載され好評を博し、同社から上梓された。

近世の飛騨には二つの騒動があり、江馬修が「梅村騒動」を『山の民』として書き、霞好夫が「大原騒動」を『やがて来る夜明けのために―大原彦四郎の妻―』と『天明嵐』の二冊に分けて書いたことになる。

霞が主催し、刊行した『飛騨作家』の終刊号に「幽愁上総介」は第一部のみ掲載されたが、昭和六十三年八月『長編小説　幽愁上総介』として、かすみ文庫から上梓される。「一生一代のぜいたくとして、和綴装本であるが、お許しを頂きたい」と豪華であった。執筆のなかば手足のしびれ、頭の芯の痛みに午前中一枚、午後一枚が精いっぱいだったという。霞好夫はのたうちながらペンを握っていたのだ。

その後の十月十五日、小康を得た霞好夫を招いて、みんなでお祝いの会が催された。

平成七年一月、家族や友人たちに見とられ静かに永い眠りについた。懸命に生きた七十九年の人生だった。

追記　霞さんは市職員・市議を務めた後、古書店「かすみ文庫」を営み、各層の研究者に便宜を図った。

昭和63年　霞 好夫「幽愁上総介」出版記念会（1列目右から5人目）